



映画化された『伊豆の踊子』における「旅」の象徴性
「自分探し」と「他者の発見」 試論

By

Amira Saeed Ali Youssef

Department of Japanese Language, Faculty of
Languages and Translation, Egypt

The Symbolism of " Journey " in the film Adaptation of the Novel of "The Izu Dancer"; A Tentative Discussion of "Self-Discovery" and "The Discovery of the Others"

Amira Saeed Ali Youssef

Department of Japanese Language, Faculty of Languages and Translation, Egypt.

Email: Moslemamasriyaamira@gmail.com

ABSTRACT:

In this study, I focused on the life of Kawabata Yasunari, outlined his novel "The Dancer of Izu," and specifically examined the symbolism of "journey" in the film based on the novel.

Whether we consider between the lines of "The Dancer of Izu" or the flow of the novel in the film, it became clear that Kawabata Yasunari may have also referred to the influence he himself received from the dancers. I considered that through "The Dancer of Izu," which reflects his own actual experiences, Kawabata Yasunari wanted to convey the message that people do not learn lessons from intellectuals only, but also people may learn from dancers and entertainers, who are honest people enough to leave a deep impact on the hearts of others.

I also considered that Kawabata Yasunari or the protagonist "I," who seems to have set out on a journey to find comfort for his loneliness, was able to grasp not only the comfort but also the fact of being blessed with a favorable character. At the same time, I considered that he was able to grasp the wonderful purity of the dancers, whom he had not come into contact with before, and that he could taste the beauty of the dancers' hearts. In this way, on the trip to Izu, the protagonist, who took the place of Kawabata Yasunari, had the unique experience of "discovering himself" and "discovering others."

Furthermore, I also mentioned that "Izu," where he broke up with the persons he loved, was depicted as a symbol of the "life" of the writer Kawabata Yasunari, who lost his beloved family. In addition, I made it clear that the "journey" to "Izu" was a symbol of "self- discovery" and "the discover of the others," and that the significance of the journey was not so much about the "dancer" he fell in love with in "Izu," but rather about learning about the "wisdom of life" from the "dancers" he met in "Izu". And the value of "making others happy" that he learned through treating dancers mercifully. This is what Kawabata Yasunari wanted to convey as his message through his novel.

Keywords: *The Dancer of Izu, Kawabata Yasunari, Journey, Self-Discovery, the Discover of the Others, Symbolism, Making Others Happy*

رمزية "الرحلة" في الفيلم المأخوذ عن رواية "راقصة إيزو" - رؤية حول " البحث عن الذات" و" اكتشاف الآخرين -

أميرة سعيد علي يوسف

قسم اللغة اليابانية، كلية اللغات والترجمة، مصر .

البريد الإلكتروني: Moslemamasriyaamira@gmail.com

الملخص:

تناولت هذه الدراسة حياة الأديب الياباني كاواباتا ياسوناري، كما قدمت لمحة عامة عن روايته "راقصة إيزو"، وذلك بالتركيز على رمزية "الرحلة" في الفيلم المأخوذ عن الرواية المذكورة. وسواء نظرنا إلى الأمر من بين سطور رواية "راقصة إيزو" أو من منظور تدفق القصة المأخوذة عن تجربة الكاتب الشخصية فالشاهد في الأمر أن كاواباتا ياسوناري ألمح إلى تأثير الراقصين في حياته، وذلك من خلال رسالته الخفية التي يمكن استخلاصها من بين سطور روايته، والتي يعتقد أنه أراد أن يقول من خلالها إن الناس لا يتلقون العلم على أيدي المتقنين فقط، وإنما يمكن للمرء أن يتعلم من أشخاص بسطاء مثل الراقصين وأصحاب المهن المسلية ونحوهم، فهم أشخاص صادقون يتركون أثرًا عميقًا في قلوب الآخرين.

علاوة على ذلك، فإن كاواباتا ياسوناري أو البطل المحوري "أنا" - الذي جسّد شخصية الكاتب نفسه - والذي يبدو أنه انطلق في رحلة لمواساة ذاته والترويح عن نفسه من العزلة التي كان يعاني منها، استطاع أن يواسي ذاته بالفعل، لكن الفرصة قد سنحت له - في ذات الوقت - باكتشاف مواطن جمال في شخصيته لم يكن يدركها من قبل، وذلك من خلال ردود أفعال الراقصين تجاهه، والذين لمس جمال قلوبهم من خلال تعامله معهم، حيث لم تكن لديه فرصة للتعامل مع أشخاص مثله من قبل. ومن ثم استطاع الكاتب أو البطل - فكليةما واحد - أن يبحث عن ذاته وأن يكتشف الآخرين، خلال رحلته.

وخلص البحث إلى أن "إيزو" التي فارق فيها البطل من أحبهم، هي بمثابة رمز لحياة الكاتب التي فقد فيها أسرته الحبيبة. وعليه، فإن "الرحلة" إلى "إيزو" هي رمز "للبحث عن الذات" و"اكتشاف الآخرين". كما تبين أن رحلة كاواباتا ياسوناري إلى إيزو ليست مجرد رحلة عاش فيها قصة حب لم تكتمل، وإنما كان المكسب الحقيقي في هذه الرحلة هو إدراك الكاتب البطل لقيمة "الحياة" - تلك القيمة التي تعلمها من الراقصين، ولقيمة "إسعاد الغير" - التي تعلمها تلقائيًا من خلال تعاطفه وتعامله معهم.

الكلمات المفتاحية: راقصة إيزو، كاواباتا ياسوناري، الرحلة، البحث عن الذات، اكتشاف الآخرين، الرمزية، إسعاد الغير.

本研究において、川端康成の生涯に焦点を当て、彼の『伊豆の踊子』という小説の概要を述べた上、具体的にその小説に基づいて上映された映画における「旅」の象徴性について検討してきた。

『伊豆の踊子』の小説の行間からも考えようと、その映画化されたストーリーの流れからも考えようと、川端康成は自分自身が踊子達から受けた影響についても暗示したことを明らかにした。川端康成は、人は知識人から教訓などを学ぶ訳ではなく、踊子達や芸人などのような人たちは、むしろ、素直な人たちだからこそ、他人の心に深い影響を与えて残すというメッセージを、自分自身の実際経験を反映した『伊豆の踊子』から伝えたかったと考察した。

それに、寂しい自分のための慰めを探しに旅立ったと思われる川端康成あるいは「私」である主人公は、慰めだけではなく、自分自身が好ましい性格に恵まれたという事実を把握することができたのではないかと考察した。それと同時に、これまでは接触しなかった踊子達の素晴らしい純粋性を把握することまでもでき、踊子達の心の美しさを味わったことについて検討してきた。このように、伊豆への旅先で、川端康成と代わった主人公は「自分探し」と「他者の発見」とそれぞれのユニークな体験をしたのであろう。

さらに、好きな人と別れてしまった「伊豆」は、好きな家族を失ってしまった作家川端康成の「人生」の象徴として描かれたことにも触れた。それに加え、「伊豆」への「旅」は、「自分探し」と「他者の発見」の象徴であり、「伊豆」で好きになった「踊子」のことというよりも、「伊豆」で出会った「踊子達」から学んだ「生きる知恵」と「他人を幸せにする」価値観に関する感覚を覚えることこそは旅の意義であった、ということをメッセージとして、川端康成は伝えたかった、ということを判明させた。

キーワード

伊豆の踊子、川端康成、旅、自分探し、他者の発見、象徴性、他人を幸せにする

1. はじめに

日本は世界中の国々と同様に、小説家が書いた小説を映画にすることがある。映画化された小説の方が印象的であろう。なぜかという、読書だけによって小説が語る物語・ストーリーを理解するより、登場人物や役者の顔の表情に続き、彼らの反応や動き等を通して、物語やストーリーの内容を理解してみた方が、物語やストーリー等の内容がさらに興味深く読み取れるだろうからだと思われる。

本研究においては、映画化された日本小説の中から、日本文学作家のノーベル文学賞受賞者である川端康成の文学作品のうち、日本人にも親しまれており、世界中においても周知されて評判がいい『伊豆の踊子』を取り上げるに当たり、1993 年に映画化のみならずドラマ化もされたので、大ヒットした『伊豆の踊子』の映画版¹を中心に、それにおける「旅」の象徴性を取り上げた上、作家川端康成の小説世界における象徴主義的性格を明らかにしたい。

1968 年にノーベル文学賞を受賞して、50 年間以上が経ったが、約半世紀を通して、日本小説の長老である川端康成（カラム ハリール サーレム 「川端康成（1972-1899）」、『カイロ大学文学部紀要』、1994 年 4 月、109 頁、（以下、サーレム前掲書））の小説に対する論評はこれまでに日本内外においても数多くなされている。特に『伊豆の踊子』を、川端康成の小説の中の最高傑作としてあげる人も少なくはなく、すでに何人かの人が論じている。ただ、具体的に『いずの踊子』における「旅」の象徴性については、十分説得的とは思われない。

2. 日本における象徴主義の誕生

カラム・ハリール（『日本文学史的考察 日本文学研究シリーズ 第三講 第二次世界大戦の以前と戦中における文学運動の潮流と歴史』、カイロ大学文学部出版、2018-2019 年、17 頁（以下、カラム前掲書））によると、第一次世界大戦後、ヨーロッパでは象徴主義運動などの新しい文学運動が隆盛した。

実は、ヨーロッパ人文学作家-殊にフランス人詩人-は、直接的な言語だけでは、自分たちの心底の気持ちや感情を表現するのは不可能となり、その代わりに、自分たちが感じていることをより深く描写できる新しい方法を調べた結果、いわゆる象徴主義による著作に頼ったのである。そこで、象徴主義は、写実主義と自然主義の学派に対する反応として、特に 19 世紀前半にフランスで現れた文芸運動であり、フランス人文学作家はそれを通してこの世の秘密を表現することを目的とした。

ところで、象徴主義の文学運動は、フランスをはじめとしてヨーロッパ全体に盛んになったにもかかわらず、ヨーロッパの国境を越え、当時の日本の若者文学作家にも影響を及ぼし（カラム前掲書、17 頁）、19 世紀前半と後半に日本文学に大きな影響を与えたのであろう。

3. 川端康成の小説における新感覚性と象徴性

カラムが主張しているように、日本小説の長老である川端康成は、他の日本人若者文学作家と同様に、当時のフランス現代象徴主義運動から大きな影響を受けたが、川端康成は、他の作家と違って、当時の現代象徴性ととも、いわば日本の精神の神髄ならびに日本文学の伝統的な概念を守り、彼自身の文学作品においては、日本の古典文学のいわゆる「もののあわれ」・「わび」・「さび」を反映させることに努めたのであろう（カラム前掲書、13、17・18 頁）。

また、1923 年後に横光利一が成立した「新感覚派」の先駆者として周知されている川端康成（カラム前掲書、8 頁）は、当時の現代象徴主義を「新感覚派」の規則による小説作成の欠かせない要素として、その象徴主義から生まれる象徴性を、自分自身の小説の深さや美しさを判明させる要素として扱おうとしていたかのようである。さらに、川端康成の代表作かつ傑作として見做されている『伊豆の踊子』は、象徴性によって作成された小説だということも考えられる。

4. 川端康成の実験経験を語った『伊豆の踊子』をめぐって

川端康成（1899 年〈明治 32 年〉6 月 14 日 - 1972 年〈昭和 47 年〉4 月 16 日）は、大阪で生まれ、父川端は康成が 2 歳の時に亡くなり、母は 3 歳の時に亡くなった。従って、父方の祖父母が康成を育ててくれたのだが、年が経って、二人とも亡くなってしまったら、康成の叔父の家に移ることになっていた。しかし、そんなに叔父との関係は強くなかった。又、そのように、家族の人達を亡くしてしまったことと、康成が良い生徒だったため、政府から奨学金をもらったので、叔父にお金をもらう必要もなく、その家に行くこともあまりなかったのである。やがて、寂しい中、しかも、孤児根性で歪んでいる自分の性質の反省による息苦しい気持ちに堪え切れない（金 裏妊「『伊豆の踊子の世界』―踊子の女神説―」、山口県大学共同リポジトリ、<https://ypir.lib.yamaguchi-u.ac.jp>、49 頁）川端康成は「伊豆」という半島を旅行することにした。

以上の絡まれた事情のせいで、川端康成は、自分の青年の間、決まった一つの居場所にいられず、居場所に行くたびにやがてそれを去って他の居場所に移っていたので、旅人のように自分の青年を過ごしたと考察される。居場所が決まっていなく変わってばかりいたからだけではなく、それに、旅人が旅先で出会う人々と長くいられないと同様に、自分の家族と親類の人が次第に亡くなったせいで、川端康成自身も自分の家族の人と長くいられなかったからなのではないか。言い換えれば、ほとんど故郷がない生活を過ごしたと考えられる川端康成は、居場所と離れて知り合いになった人々と離れる瞬間がいつかきつとくるだろうと悟る旅人のように暮らしていた、ということが考慮されるのではないであろうか。

「^{わたくし}私小説」として特徴され、作家川端康成自身の青年を描いたとされる『伊豆の踊子』（サーレム前掲書、112 頁）と同様に、1993 年に上映された『伊豆の踊子』の映画版では、「私」という主人公が東京を出発し、「伊豆」に行ったときに、踊っている美しい「薫」という踊子と彼女が属する旅芸人のグループに会った。偶然に「私」という主人公と彼女達は同じ所に行くところだったので、一緒に行ったのである。実際に、その「薫」という踊子は美しいという以外に、非常に純情であったので、「私」という主人公は情欲を持ってしまったのである。しかし、ある日、「私」が温

泉に入った時に、「薫」は裸いた。その時、「私」は「薫」を見、「薫」がまだ子供だということがはっきり分かった。つまり、まだ、大人になっていない女だということである。そこで、「私」という主人公は自分の考えを変え、その踊子をただの友達として扱うようになっていった。

ただ、ここにおいては、次のように疑問点を提出しておく。なぜ川端康成はその時に旅行に出ることにしたか。実は、1920～21 年に川端康成は英文学を勉強するため東京帝国大学に入学したが、川端康成は大学のアカデミックな勉強にあまり熱心ではなく、文学的活動に夢中であった（カラム前掲書、19. 20 頁）。それに加え、川端康成と代わった『伊豆の踊子』の主人公について、片山は以下のように述べている。

主人公は一言で言えば、自分を取り巻く世界との関係を前にして、立ち竦み、不安を

抱く孤独な青年である（片山倫太郎「初期川端康成における独我論的認識の形成と

方法化」、（二 感情移入説と「表現主義的認識論」）、<http://www.jstage.jst.go.jp>

[/article/showabungaku/45/0/45_14/pdf/-char/ja](http://article.showabungaku/45/0/45_14/pdf/-char/ja)、2024 年 7 月 23 日付、23 ペー

ー

ジ）」

片山が述べているように、川端康成あるいは主人公である「私」は孤独に悩んで旅立ったことが言えるであろう。特に映画化されて、1993 年に上映された『伊豆の踊子』（<https://www.youtube.com/watch?v=ObO-KxTsNkU&t=2387s>、2024 年 7 月 20 日付、（以下『伊豆の踊子』））の 1 分 10 秒から 19 秒までの数秒の間で映った以下の対照的なシーンから、集合的に移動している踊子達に対するたった一人で休んでいる主人公である「私」の孤独さが判明されるのではないであろうか。



しかも、語り手と代わって「私は二十歳、たった一人で伊豆の旅に出て（後略）」と、自分の孤独感を訴えるような口調で話している主人公である「私」あるいは川端康成自身は、孤独で寂しい青年期のせいで落ち込んでおり、気分転換のため、東京から一時間ぐらい離れた上、自然に恵まれている「伊豆」という地方に向かって旅立つことにしたということも考えられるのではないか。



（『伊豆の踊子』、1分53秒～2分00秒）

4.1 「私」と「踊子達」との関係

「私」は「薫」が一緒にいるグループの他の人達をも友達として扱っていたので、どんどん、みんなと仲良くなり、親しくなっていたのである。

実は、以下のように、踊子達のことを気になった「私」は、旅先で出会った婆さんに踊子達のことについて聞いたら、可愛そうに思ったのであろう。



私：あの人たち、今夜どこへ泊まるんでしょう。

婆さん：あんな者、どこで泊るやら分るものでございますか、旦那様。
お客があれば

あり次第、どこにだって泊るんでございますよ。

（『伊豆の踊子』、5分21～33秒）

このように、「私」は、踊子達はいかに困難な生活を送っていることが分かり、踊子達を非常に親切に扱うようにしたのであろう。従って、踊子達は、いつも、「私」のこのような良い扱い方を感謝し、「私」が親切な良い人だというように思っていたのである。ところで、「私」という主人公は踊子達に感謝され、ほめられたという理由で驚いたのである。

今、研究者は疑問がある。なぜ、「私」は踊子達を普通の扱い方で扱っているのに、そんなに感謝され、ほめられているかという疑問である。それに答えるために次の金の主張を引用する。

〈私〉と踊子をはじめ、踊子たちは、身分が違うけれども、全く共通点がないと言

えない。踊子たちが「あんな者」と差別され、世間から掛け離れているのなら、あ

る意味で、〈私〉も世間に背いている一面があるからである。（金裏妊「『伊豆

の踊子の世界』―踊子の女神説―」（山口県大学共同リポジトリ）、

<https://ypir.lib.yamaguchi-u.ac.jp>、2024年7月20日付、49ページ）

金の上述の大切な指摘に踏まえて、「私」は、差別に悩んでいる踊子達と「全く共通点がない」と同情した陰で、他人を幸せにする経験をするこ
ともできたであろう。「私」は、自分と踊子達との相違点を、一時的に無くし
ても、共通点を意図的に探したと考えられる。「私」が知識人としての学生
の身分を示す学生帽を、普通の帽子とわざわざ買い替えたのは、心優しい
「私」は踊子達に対して気を遣っているからだということが思われよう。
このような慈悲深い振る舞いに気付いた栄吉は、感激した上、以下の通り
心を込めて話しているのではないだろうか。



栄吉：私ともにご遠慮なさらなくてもいいのに

私：へえ

栄吉：旅芸人なんて世間様人間のように扱ってくれません。

私：そんな。

栄吉：いえ私はもうあきらめています。

（『伊豆の踊子』、38 分 16～32 秒）

こうして、「私」は「栄吉」の話を聞いたら、踊子達の人生はいかにっらい人生だということを改めて実感して、踊子達のことを可哀そうに思ったことも言えよう。さらに、以上の栄吉の言葉を、踊子達の悩みに対する訴えとして読み取られるかもしれないが、行間から覗かれるだろうと思われる、「私」に対する栄吉の気持ちは見逃しかねる。言い換えれば、踊子達の困難な生活に対する栄吉の嘆きの気持ちとともに、踊子達を幸せにしたい「私」の振る舞いに対する栄吉の感情が湧いている、ということなのではないであろうか。孤独で自分自身の世界だけに閉じ込められた「私」は、踊子達と出会った陰で、「人を幸せにする」切っ掛けに出会い、「人を幸せにする」価値観について学んだといっても言い過ぎではないであろう。

このように、「私」の人の扱い方は「私」にとっては普通の扱い方であったが、踊子達にとっては、それがより好い扱い方であったと考えられる。他人から差別的に厳しく扱われてしまう踊子達にとっては、親切に優しくされる扱いは、ありがたい扱い方だと言っても過言ではないであろう。それで、「薫」と「おふくろ」は「私」について、以下のように感謝の気持ちを持って話し合う。



薫：いい人ね。

おふくろ：それはそう。いい人らしいね。

薫：本当にいい人ね。いい人はいいね。

(『伊豆の踊子』、1時05分29～39秒)

以上のように、「薫」とおふくろの個々の顔の表情を考えると、踊子達にとっては、踊子達に対する「私」という主人公の人の扱い方は、踊子達が慣れている人々の扱い方と全然違っていたことが窺えるであろう。「私」という主人公以外の人達は踊子達を「あんな者」達として扱っていた。しかし、「私」という主人公は踊子達を、「あんな者」もしくはただの踊子達では全くなく、友達や仲のいい知り合いにまでなれるごく普通の人間として扱っていた。従って、「薫」も彼女を親切に扱ってくれた「私」のことを「本当にいい人」だと考えれば、おふくろも同じく「私」のことを「いい人らしいね」だと考えることは珍しくないことであろう。

因みに、同じことを他の踊子達についても言うことができる。前にも述べた通り、「私」という主人公は踊子達に自分の家族のように接してくれるグループの一人として扱っていた。従って、別れる時、「私」という主人公も踊子達も皆非常に悲しかったのは当然なのであろう。

果たして、なぜ「私」は踊子達をこんなに優しく扱うことにしたのであろうか。これは「私」が踊子達の心の底の美しさを見出したからだと思われる。タオ・イアン (Jian Tao) が「2.3 The Other side of Beauty」に

において、具体的に、踊子に対する「私」の気持ちと感情について、以下の
ように主張している。

But they also have virtues, such as being very kind, respectful and friendly
towards “me” (Jian Tao, On the Obscure Youth Love in “the Dancing Girl of
Izu. School of Foreign Languages,

Xichang University, Xichang, Sichuan, 615000, China,(2021) [chrome-
extension://efaidnbmnnnibpcajpcglclefindmkaj/https://webofproceedings.org/pro
ceedings_seri
es/ESSP/SOSHU%202021/WHCP21A020.pdf](https://webofproceedings.org/proceedings_series/ESSP/SOSHU%202021/WHCP21A020.pdf),17 頁)

(筆者訳：しかし、彼女たちには「私」に対してとても親切で、敬意を
払い、友好的であるなどという美德もある。)

タオ・イアンが述べているように、「私」は、一般の人々に知られてい
なかった、踊子達の本性の美しさを発見することができ、その発見の陰で、
「私」も踊子達にとっては、親切で友好的だったということが考えられる。
このような発見だけでも、「私」の「伊豆」への「旅」は有意義だったと
言えるのではないか。

4.2 「私」が「伊豆」への「旅」から学んだ教訓

実際に、「私」という主人公が踊子達を親切に扱っていた理由の一つだ
けではない。作家川端康成の気持ちを反映する目的で描かれた「私」とい
う主人公の精神をよく考えてみると、次の理由も出てきそうである。「孤
児根性」を持った「私」である主人公は、「伊豆」という地方に行って新
しい環境に入り、踊子達と仲良くし、そこで大切なことが初めて分かった
かのであろう。それは次の通りである。

「私」は、自分がその時まで踊子達と全然会ったことはなかったが、出
会った後、互いに話し合ったり、一緒に時間を過ごしたりしていくうちに、
「私」は踊子達を、失ってしまった自分の家族のように感じ、非常に親切

に接したのであろう。つまり、伊豆への旅で「私」と踊子達はすっかり意気投合したということである。これは、踊子達が非常に親切で純粋な人達だったからだけではなく、もう一つの理由が考察される。

『伊豆の踊子』において、踊子達は「私」という主人公に大切なことを教えたと考察される。それは、「私」が親切な良い人だ、ということである。「私」という主人公は孤児根性があり、孤独感を持ち、踊子達と出会うまでは、「私」にはそのようなことを言われる機会はなかった。それゆえ、踊子達は素朴な人々なのに、より教芸のある大学生である「私」に彼自身が実感していなかったことを知らせることが出来たということが言えるのである。

このように、孤独感や孤児根性に悩んだ「私」は、一方、差別や不安定な境遇に悩んでいた踊子達に同情したため、踊子達とそのように非常に親しくなり、打ちとけ合った。従って、以下のスクリーンショットから明らかのように、「私」は東京へ勉強に帰るために、踊子達と別れなければならないことになったら、特に、「薫」も非常に悲しくなれば「私」自身も悲しくなることは当然なことであつたろう。



(『伊豆の踊子』、1時23分03秒)



(『伊豆の踊子』、1時24分59秒)

5・おわりに

以上、日本文学者のノーベル文学賞受賞者であり日本小説界の長老である川端康成の生涯に焦点を当て、そして川端康成の傑作としてされる『伊豆の踊子』という小説の概要を述べた上、具体的にその小説に基づいて映画化された映画に着目し、それにおける「旅」の象徴性について検討してきた。

川端康成の生涯を考慮した上で、『伊豆の踊り子』を小説として読んでも、その映画化されたムービーを見ても、『伊豆の踊子』のテーマは、主に孤児性からの解放、自信回復、そして愛に対する感謝、という3つの側面から成り立つ(クレシン「概要」『川端康成の『伊豆の踊子』試論』、修士論文、ハルビン科学技術大学、<https://www.dissertationtopic.net/doc/2171521>、2014年)ことが誰でも簡単に気付くであろう。特に、『伊豆の踊子』を恋愛小説として読み取った人たちが大勢いることは言うまでもない。

但し、『伊豆の踊子』には隠れたもう一つの意義がある。小説の行間から考えるにせよ、その映画化されたストーリーの流れから考えるにせよ、川端康成は自分自身が踊子達から受けた影響についても暗示したのではないであろうか。踊子達の気持ちの温かさに感動した川端康成は、彼らが彼のことをほめてたことで、自分も温かい気持ちを持つ優しい人だというこ

とに初めて気が付いた。従って、川端康成は、人は知識人からのみ教訓などを学ぶのではなく、踊子達や芸人などのような人たちからも学び、むしろ、彼らが素朴な人たちだからこそ、他人の心に深い影響を与えて残すのだというメッセージを、自分自身の実体験を反映した『伊豆の踊子』を通して伝えたかったと考察される。

ただ、日本の古典文学のいわゆる「もののあわれ」・「わび」・「さび」を反映させることに努めた川端康成は、孤独感や寂しさと悲しさの陰で、一人旅の旅先で自分の性格のユニークさを実感した、という自分自身の幸せについても語りたかったと考えられ、彼は「失恋」を語るストーリーの背後に隠れた経験を判明させたかったと思われる。それは「自分探し」・「他者の発見」と関わる経験であろう。

孤独な自分のために慰めを求めて旅立ったと思われる川端康成あるいは「私」である主人公は、慰めだけではなく、自分自身が好ましい人格に恵まれたという事実をも認識することができたのではないかと考察される。それと同時に、これまでは接触することのなかった踊子達が素晴らしく、純粋な人達である、ということまでも知ることができ、踊子達の心の美しさを味わうことがあったのだと言えるのではないであろうか。このように、伊豆への旅先で、川端康成に成り代わった主人公は「自分探し」と「他者の発見」というそれぞれのユニークな体験をしたのである。

『伊豆の踊子』という作品名を読んだ時、「伊豆」のある「踊子」についての物語だと簡単にまたタイトルそのままに考えられるのはよくあることであろう。しかし、果たして、新感覚派の一特徴と見做される象徴性の影響を受けた川端康成は、そのような直接過ぎる目的で『伊豆の踊子』を制作しようとしたのか、という疑問を抱いた筆者は、以上考察してきた通り、その疑問点に留意しつつ、次のように結論付けたい。

好きな人と別れた「伊豆」という場所は、愛する家族を失った作家川端康成の「人生」の象徴として描かれた。その「伊豆」への「旅」は、「自分探し」と「他者の発見」の象徴であり、「伊豆」で好きになった「踊子」のことというよりも、「伊豆」で出会った「踊子達」の陰で認識した、「生きる知恵」を学んだことこそが旅の意義であった、ということをメッセージとして、川端康成は伝えたかったのではないであろうか。

出典

『川端康成全集』第二巻 新湖社、1980 年 10 月

映画

『伊豆の踊子』1993 年上映（<https://www.youtube.com/watch?v=ObO-KKxTsNkU&t=2387s>）、2024 年 7 月 20 日付）

参考文献

アラビア語の参考文献

كرم خليل، (2019-2018). رؤية حول الأدب الياباني سلسلة أبحاث في الأدب الياباني
المحاضرة الثالثة تاريخ تطور الحركات الأدبية ما قبل وأثناء الحرب العالمية الثانية. كلية
الآداب جامعة القاهرة

カラム・ハリール『日本文学史的考察 日本文学研究シリーズ 第三講
第二次世界大戦の以前と戦中における文学運動の潮流と歴史』（カイロ大
学文学部出版、2018－2019 年）

كرم خليل سالم، (1994). كاوياتا ياسوناري 1899-1972. مجلة كلية الآداب جامعة
القاهرة.

カラム ハリール サーレム 「川端康成（1972-1899）」（『カイロ大学
文学部紀要』1994 年 4 月）

日本語の参考文献

片山倫太郎「初期川端康成における独我論的認識の形成と方法化」
（https://www.jstage.jst.go.jp/article/showabungaku/45/0/45_14/_pdf/-char/ja
、2024 年 7 月 23 日付）

北野昭彦「『伊豆の踊子』の〈物乞ひ旅芸人〉の背後——定住と遍歴、役者と演劇青年、娘芸人と学生」『日本言語文化研究』第10号（龍谷大学、2007年3月）

金 裏妊「『伊豆の踊子の世界』—踊子の女神説—」（山口県大学共同リポジトリ）、<https://ypir.lib.yamaguchi-u.ac.jp>、2024年7月20日付）

長谷川泉 編『川端康成——その愛と美と死』（主婦の友社、1978年）

英語の参考文献

Jian Tao, On the Obscure Youth Love in “The Dancing Girl of Izu. School of Foreign Languages, Xichang University, Xichang, Sichuan, 615000, China (2021) <chrome-extension://efaidnbmnnnibpcajpcglclefindmkaj/https://webofproceedings.org/proceedings-series/ESSP/SOSHU%202021/WHCP21A020.pdf> (Dated:22-8-2024).

タオ・イアン「『伊豆の踊子』の知られざる青春の恋について」（西昌大学外国語学部、西昌、四川、615000、中国、2021年、<chrome-extension://efaidnbmnnnibpcajpcglclefindmkaj/https://webofproceedings.org/proceedings-series/ESSP/SOSHU%202021/WHCP21A020.pdf>、2024年8月22日付）

QuLeXin. Kawabata Yasunari The Izu Dancer narratology. Harbin University of Science and Technology (2014) .
<https://www.dissertationtopic.net/doc/2171521> (Dated:6-8-2024).

クレシン「概要」、『川端康成の『伊豆の踊子』試論』（修士論文（2014年度）、ハルビン科学技術大学、<https://www.dissertationtopic.net/doc/2171521>、（2024年8月6日付）

その他

日本名作ドラマ 伊豆の踊子、<https://www.bpcj.or.jp/program/detail/005313/>、（2025年5月7日付）

ⁱ映画化された『伊豆の踊子』の一覧

映画	公開	監督	主演
『恋の花咲く 伊豆の踊子』	1933 年	五所平之助	田中絹代、大日方傳、河村黎吉、小林十九二、若水順子、新井淳
『伊豆の踊子』	1954 年	野村芳太郎	美空ひばり、石濱朗、由美あづさ、片山明彦、雪代敬子、三島耕、日守新一、南美江、松本克平、多々良純、桜むつ子
『伊豆の踊子』	1960 年	川頭義郎	鰐淵晴子、津川雅彦、桜むつ子、田浦正巳、城山順子、瞳麗子
『伊豆の踊子』	1963 年	西河克己	吉永小百合、高橋英樹、大坂志郎、堀恭子、浪花千栄子
『伊豆の踊子』	1967 年	恩地日出夫	内藤洋子、黒沢年男、江原達怡、田村奈己、乙羽信子
『伊豆の踊子』	1974 年	西河克己	山口百恵、三浦友和、中山仁、佐藤友美、一の宮あつ子、鈴木ヒロミツ、浦辺粂子、石川さゆり、江戸家猫八
『伊豆の踊子』 (映画化とドラマ化の両方された版)	1993 年	恩地日出夫	木村拓哉、早勢美里、石橋蓮司、川上麻衣子、でんでん、桑名優香、松永真以子、中村美代子、飯塚雅弓、水木薫、今野友美、柳沢慎吾、加賀まりこ